

令和元年6月21日現在

機関番号：32413

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07065

研究課題名（和文）教師はいかにして子どもの信頼を醸成するか ルーマン信頼論を子ども理解で編み直す

研究課題名（英文）How Can Teachers be Trusted by Children?

研究代表者

横井 夏子 (Yokoi, Natsuko)

文京学院大学・人間学部・助教

研究者番号：50806411

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、教育関係において最も重要な概念の一つである「信頼」について考察したものである。とりわけ学校教育では、行政機関を含む多くの当事者が「信頼される教師」の必要性を謳っているが、実際のところ信頼はそれほど万能ではない。小中学校の教師の協力を得て、学校のなかで教師と子どもとのやりとりを観察したり、教師らによる教育実践記録を読み解いたりすることで、教師への信頼にはむしろ「不信」が含まれていることが立証された。

ここで得られた知見をもとに、教師の子ども理解と子どもからの教師への信頼との関連をみることで、子どもと教師の垂直的な関係性を組み替えていく可能性があることを、まずは道德教育の文脈で示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学校教育において、「信頼される教師」がこれまでもこれからも求められていることは、多くの人が経験的に同意するであろう事実である。とりわけ2000年以降、中教審答申や全国の教育委員会による行政文書などでも、教師が子どもや保護者らから信頼されるべきだと強調される。しかしながら、信頼をより根源的な意味でとらえつつ、教師に「信頼されること」を過度に押し付けてしまうと、かえって重層的な人間関係のなかで良好な教育関係を構築しにくくなってしまふ。

本研究では、信頼／不信の区別に着目することを通して、忌避されがちな不信が逆説的に信頼を強化するという可能性について、具体的な教育実践を参照しつつ明らかにしている。

研究成果の概要（英文）：This is a study on the theory of “Trust”, which is one of the most important ideas in the relationships of education. Especially in school, most of the actors, including the administrative agency, might think that teachers must be trusted by every actor. But actually, “Trust” does not function efficiently at times. Rather, it comes to be clear that trust for teachers is empowered by the opposite idea, “Distrust”, by investigating how teachers and children act each other and analyzing the Practice Documents written by particular teachers at public school in Japan.

As a result, we come to be able to get a new perspective of relationships among the actors. My thesis examines the research of the teachers’ way to understand children and the children’s way to trust their teachers in Moral education; the relevance of drawing the distinction between trust and distrust and studying both ideas.

研究分野：教育学

キーワード：信頼 子ども理解 道德教育

## 1. 研究開始当初の背景

教育関係において、教師は子どもや保護者などから信頼されることが役割的に期待されている。とりわけ学校教育では、近年の中教審答申や全国の都道府県教育委員会による「求める教師像」として「信頼される教師」の重要性が喧伝されており、このことは経験的にも広く一般に支持されているように見える。しかし、そうであるがゆえに、「信頼される教師」という言説には、個々の教師を追いつめ、教師や学校の負担をさらに増大させかねない危険性がある。このことはまた、信頼概念の多義性にもとづく解釈の幅にも起因している。

このような課題に対処するため、本研究では以下のように取り組む必要があった。すなわち一方では、ドイツの社会学者ニクラス・ルーマン ( Niklas Luhmann, 1927-1998 ) の信頼論を手がかりにして、「信頼/不信」の機能的意義を明らかにする。他方では、教師の綴る教育実践や教育実践記録を手がかりとして、教師による「子ども理解」( 教師がどのようにして子どもの行為の理由を探っているか ) に着目し、子どもから信頼を得る様子を観察・記述する。

学校がますます多忙を極める近年において、信頼の機能的意義を理論および実践の往還から理解することは、教師や学校の過度な負担を和らげつつ教育実践の発展を目指すために不可欠な、喫緊の課題であるといえる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、学校教育で教師が子どもからいかにして信頼を獲得し良好な教育関係を取り結んでいるかについて、ルーマンの信頼論を用いて具体的な教育実践を観察し教育実践記録を読み解くことである。

これまで研究代表者は、教育関係での教師への不信が学校や制度レベルでコントロールされることで、システムへの信頼を得られること ( 不信の機能的意義 ) を理論的に解明してきた。本研究ではさらに、不信の機能的意義を教育実践や教育実践記録のなかに探った。教師がどのようなふるまいを意図し行為しているか、また子どものふるまいをどのように理解しているかを観察することで、子どもの信頼が育まれる過程に接近することが可能になる。

そこで、教育実践や教育実践記録を綴り蓄積してきた民間教育研究団体等における議論から得られる知見を、研究代表者の解明した議論に接続することを試みた。これによって、「教師への不信を一時的な経由地として、そこから信頼を育てていくメカニズムを解明する」ことを企図し、個々の教師を追いつめ学校の負担を増大させる言説を克服するためである。そのなかで、一般的には敬遠されがちな不信という概念が、学校現場でいかに信頼を育むことに寄与するかを示し、子どもや保護者からの信頼をいつでも必要とする圧力に晒される教師や学校に、遂行中断性 ( affirmative ) というゆとりを齎す。

## 3. 研究の方法

本研究では、以下の4つの作業課題を設定し、これに沿って研究を進めていった。

(1) 教育現場における信頼を醸成する教師のふるまいのもととなる「子ども理解」に関連する文献のレビュー [ 文献レビュー ]

(2) 実際の教育現場における教師のふるまいと子どもの示す信頼の観察調査 [ 参与観察・プレ調査 ]

(3) プレ調査の反省を踏まえた、教師のふるまいと子どもの示す信頼の観察調査と教師への事後インタビュー調査 [ 参与観察・本調査 ]

(4) 以上の個々の研究成果を関連づけ、本研究の一連の成果として考察・発信する [ 記述・説明 ]

### [ 文献レビュー ]

ルーマンの信頼概念は、「他者の予期の予期」によって自らの行為選択の幅を狭めるという「複雑性の縮減」( Reduktion von Komplexität ) の機能を果たすものである。とりわけ学校教育においては、教師にとって、他者たる子どもの自由な意思による判断や行為選択が不確定であるなかで、それでも信頼を獲得するためには、子どもの予期を予期し、その予期を成就させるようふるまうことが求められる。このことは、教育実践の場で「子ども理解」として語られ、教育科学研究会など民間教育研究団体における議論の蓄積がある。子ども理解の深い ( 子どもの行動の理由にセンシティブな ) 教師のふるまいは、子どもに「理解されている」という感覚を与えるため、子どもから肯定的な予期に基づく行為選択を引き出しうる。

教師による子ども理解関連の文献を中心に収集し整理することで、教師のふるまいの根底にある思想に接近した。さらに上述のように、ルーマン信頼論を「子ども理解」の文脈と関連づけることで、学校などの教育現場において、子どもの抱く信頼が、子ども理解との関連でどのように語られているかを読み解いた。このレビューを経て、のちの諸調査において、教師が子どもからの信頼を獲得する様子が観察可能になった。

#### [ 参与観察・プレ調査 ]

教師のふるまいの根底にある思想を探る方途としては、実際に教師のふるまいを観察し、その意図を教師本人に確認することも効果的である。そのため、これまでの理論研究で得られた知見を踏まえて、教師ら現場関係者に協力を仰ぎ、授業における（教師と子どもの）ふるまいを観察し分析するための参与観察・調査を行った。2017年度の期間を、参与観察・調査の準備期間と位置づけ、協力者である教師と複数回にわたる折衝を重ねて、本調査の指針を得た。

ここでは、とくに初等および中等教育学校（以下、「学校」と総称）の教師との打ち合わせを行い、複数の学校で複数の教師の授業等を見学することで、教師のふるまいやその意図を確認しつつ、その教師の子ども理解のあり方を観察した。

#### [ 参与観察・本調査 ]

ここまでの文献レビューおよび参与観察・プレ調査において、教師のふるまいの根底にある思想を探ると同時に、本研究の関心を教師とも丁寧に共有した。2018年度もこれに引き続き、協力者となった教師らの授業における（教師と子どもの）ふるまいを観察し分析するための参与観察・本調査を行った。

本年度の前半を、参与観察・本調査の期間と位置づけ、協力者である教師らと折衝を重ねていたが、当該教師らの多くが、「持ち上がり」学年の担任ではなかった。そのため必要に応じて、本年度の後半も参与観察やインタビューを続け、教師が子どもからの信頼を獲得する様子や教師が子ども理解を深める様子を観察することとした。

#### [ 記述・説明 ]

以上の文献レビューおよび参与観察・本調査等から得られた知見をもとに、教師の子ども理解と子どもからの教師への信頼との関連を理論的に明らかにし、子どもと教師の関係性を組み替える可能性についての考察を、本研究の成果として発信した。

2018年に二度にわたって寄稿依頼を受けた月刊誌『教育』は、初等および中等教育学校の教師らを主な読者層とする、民間教育研究団体の一つ「教育科学研究会」の編集・発行する専門誌である。本研究において、不信の機能的意義を教師らに発信することは、これまでの参与観察とは異なるかたちでの理論と実践の往還である。

また2018年に寄稿依頼のあった図書（論文集）は、2018年度・2019年度から小中学校で全面実施された「特別の教科 道徳」を含む道徳教育をメインテーマとして、それに関する理論と実践を探る研究者および教育実践者の論考を集めていた。教職課程のテキスト・参考書として、あるいは広く一般書としての読者を想定する本書への寄稿は、本研究の成果を広く社会に発信する手段として合理的かつ妥当なものであるといえよう。なお執筆時期に鑑みると、本稿に含められない知見が出ることも当然想起され、実際に本年度の後半に行った参与観察については、まだ発信の機会を得ていない。そうした知見については、翌年度以降の学会誌に投稿する予定である。

## 4. 研究成果

本研究では、ルーマン信頼論の教育関係における妥当性を理論的および実践的に考察したことで、(1) 不信のもたらす肯定的な機能の解明に成功した。またその過程で、教師らとともに教育実践検討会を重ねたことから、(2) 教師の力量形成のための、理論と実践の往還の重要性を明らかにすることもできた。

### (1) 不信のもたらす肯定的な機能の解明

学校教育において、教師が他者たる子どもの(自由な意思に基づく)予期を予期することは、教師が子どもの信頼を獲得する方途といえる。このことは、教育実践の場でときに「子ども理解」として語られており、教師のふるまいの根底をなす思想と切っても切れない関係にある。

教師との折衝や参与観察での教師のふるまいからみえてきたことは、個々の教師が自らの子ども理解を不断に反省しつつ、子どもの発達に応じた見通しを持っていることである。そのなかでは、子どもを管理・統制して教師の意のままに操るような手法を知っているながら、そのような短絡的な「教育技術」には陥らず、一人ひとりの子どもの「声」を丁寧に聴きとることに腐心する教師の姿を観察した。このことは、一連の文献レビューの過程で判明していた、子ども理解のなかで「声」を聴くことの重要性が、実践レベルで裏付けされたことを示す。

子どもは、その発達段階に応じて他者への依存度が下がることが予測されるものの、最初から「自立」した(他者に全く依存しない)個人などというものは存在しない。そうであるから、他者に依存せざるを得ない者やその他者から依存されている者も含めて「声」を聴く実践のなかでこそ、子どもの行動の理由にセンシティブな教師たりうるといえる(横井 2018b 招待講演)。教師らは子どもたちの「声」を、明確な主張のある発言にとどまらず、迷いを含んだ小さな声、不安そうな表情なども範疇に入れたものと解しており、子どもの感じる戸惑いや不満にとりわけ敏感に対応しようとしていた。これらの戸惑いや不満は、程度の差こそあれ、ルーマン信

頼論における「不信」の表明と解釈できる。

教師が子どもの抱く不信を排除しないかたちで教育実践が営まれている教室では、いわゆる「信頼される教師」として「忠実」にふるまおうとする教師のいる教室よりも、かえって教育関係が良好であるように思われる。なぜなら、一方で「忠実」な教師は、信頼されることを原則として堅持するがゆえに、子どもの抱く不信をあくまでも例外的にしか取り扱えない。そうなると子どもは、信頼ばかりに主眼の置かれた教育関係の周縁（というか、外側）に置かれることになる。他方で子どもが不信を表明できる（不信に居場所があるような）教室では、不信を抱く子どもですら教育関係の中心（少なくとも、内側）に位置づけられる、つまり、多様な子どもを広く包摂しうる。こうした教室を営む教師のほうが、逆説的に子どもから信頼されるということである。

この知見は、教育関係に不信という一時的な経由地を提供するため、近年の「信頼される教師」ということばの過度なプレッシャーから個々の教師や学校を解放し、教師や学校が受ける心理的、物理的な諸負担などを軽減する。さらに、不信のもつ逆説的な機能、すなわち信頼の強化という機能が理論的にも実践的にも立証されたことによって、不信の機能的意義を見出すことに成功した。

## （２） 教師の力量形成のための、理論と実践の往還の重要性

上記の本調査と並行して、教師の教育実践記録の精読・分析も行った。当初の目的では、教育実践記録の精読・分析は、参与観察への協力を仰ぐ教師の選定の手立て、また教師らの教育実践を理解する手立てと想定していた。ところが、教師の根底にある思想や教師自身の省察を読み解くうちに、教育実践記録の分析は、教師が自らの教育実践を振り返る一助となるだけでなく、他の教師や発達援助職に携わる者の多面的・多角的な視座から検討されることによって、執筆者たる教師個人や検討会参加者の力量形成にも寄与し、より広くより深く教育関係をみることにつながると確信した。このことは、民間教育研究団体が歴史的に実践してきた手法であるが、教育実践（記録）やその分析を検討する機会を最大限に利用することで、本研究における理論と実践の往還は具体的になされた。

この手法でもって、これまでの作業課題（文献レビューおよび本調査、教育実践記録の分析等）から得られた知見をもとに、教師の子ども理解と子どもからの教師への信頼との関連を理論的に明らかにし、そのことを実践記録に沿って記述・説明したことで、子どもと教師の関係性を組み替える可能性についての考察（横井 2019 図書）が可能となった。

さらに、教育実践記録と並んで掲載された論考（横井 2018a 雑誌論文）では、実践者である教師や発達援助職に携わる者らとの検討を経るなかで、教育実践記録が書かれ/読まれることが理論と実践の双方の発展にとって不可欠でありながら、そのためには当事者の少なくない時間と労力を要することを共有した。

以上から導出される、教師の力量形成において有効な視座は、以下のとおりである。教師自身が自らの教育実践を省察すること、教育実践（記録）を集団的営為のなかで検討し綴ること、教師の労働においてそれらの時間と労力を確保すること、である。

なお、とくに については、昨今の教師の「働き方改革」の一連の議論からもわかるとおり、教師の過重労働の改善は喫緊の課題である。加えて、本研究の参与観察・プレ調査後に協力者から、「観察の対象学年によっては、子どもに直接アンケートをとることが分析の助けになる可能性がある」との助言を受けていたため、本調査に際しては、子どもへの質問紙調査の可否も打ち合わせるようになっていた。しかし、質問紙調査についての打ち合わせを行うことと実施することにとまなう時間や労力を、協力者である教師らは十分に割くことができなかった。このことは、研究代表者の力量不足の面もあろうが、教師の働き方の現状と無関係ではない。

今後は、教師のおかれた現状にも目を向けつつ、引き続き教育関係のありかたを考察していきたい。

## 5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

横井夏子 (2018a) 「子ども理解のセンサーで：仲村実践を読み解く」教育科学研究会編『教育』875号、pp.22-24 (査読なし)

横井夏子 (2018b) 「「声」を聴くケアの営み：実践記録を読んで」教育科学研究会編『教育』868号、pp.23-26 (査読なし)

横井夏子 (2018c) 「「他者」を「尊重」し「協働」すること：新学習指導要領をジェンダーの視点から検討する」『文京学院大学教職研究論集』第9号、pp.83-90 (査読なし)

〔学会発表〕(計 2 件)

横井夏子 (2018a) 「学校における信頼の機能的意義に関する一考察：ルーマンを手がかりに「子どもの信頼」を読み解く」日本教育学会

横井夏子(2018b)「子どもたちを人間として扱いたい：子どもの「声」を聴くことの理論的意義を探る」教育科学研究会 三月集会(招待講演)

〔図書〕(計 1 件)

横井夏子(2019)「教師と子どもの関係を組み替える「不信」の可能性」

藤田昌士・奥平康照監修、教育科学研究会「道徳と教育」部会編『道徳教育の批判と創造：社会転換期を拓く』エイデル研究所、pp.160-177 所収

## 6. 研究組織

(1)研究分担者 該当者なし

(2)研究協力者 該当者なし